

新刊
紹介

竹中正夫 著

『アジアにおける

キリスト教美術』

—Christian Art In Asia—

(教文館、変型B5判
一七一頁、四、五〇〇円)

この美しい書物の出版は、キリスト教や美術に関心をもつ多くの人々にとっては、画期的な出来事である。この書物は、わたしたちが十分に気づいていなかった新しい

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

世界へ、わたしたちの眼を開くものである。

長年にわたる西欧の支配の結果として、多くの人々は、キリスト教美術というならば、過去五〇〇年の間に形成されてきた西欧の形態を考え、それ以外のものに対して、さして注意を払ってこなかった。たしかに、イタリアのルネッサンスのキリスト教をテーマとした作品には、すぐれたものが少なくないが、中には、キリスト教美術と呼ぶべきかどうか疑問に思うものがある。それらの中には、福音、信仰からじみ出てきた作品ではなく、人間を中心にした考え方から生れたものがある。そこには、聖書で示されているユダヤのキリストではなく、ルネッサンス期のイタリアにおける西欧的キリストが描かれている。

残念なことに、いわゆる「キリスト教美術」に、やがて、アジアやアフリカの国々において紹介されていったが、イタリアのルネッサンスに発した伝統が原型となり、それらが芸術的な深さや宗教的感動を伴うことなく、受け継がれていった。そこに、いわゆる植民地時代におけるアジア・アフ

リカのキリスト教美術の問題があった。いろいろな見解の相違はあるにせよ、西欧の近代におけるキリスト教美術は、アジアやアフリカのキリスト教美術の発展に、助力を与えるというよりも、障害となったとわたしは考えている。

幸いなことに、政治的にも、精神的にも、植民地の拘束から解放され、人々が、キリスト教信仰をそれぞれの状況において表現するようになってきた。彼らの伝統的文化を受け継ぎながら、彼らの喜びや悲しみ、たたかいや勝利の経験を、芸術作品として表現するようになった。しかし、多くの人々は、このような新しいキリスト教美術の動向にほとんど気づいていない。竹中教授の著書は、隠されていた地の宝を掘りおこし、広く世人に紹介するという役割を果たしている。これはおどろくべき発見である。

本書では、芸術作品の写真紹介が大部分を占めているが、その外に、竹中教授による優れた解説がある。それによって、アジアのキリスト美術の新しい傾向についての歴史的・文化的理解を深めることが出来

る。同教授が指摘しているように、その国独自の文化的素材を用いて、キリスト教信仰を表現することは、決して、西欧の絵画的手法や伝統を否定することではないし、また、単に感傷的に前近代的な過去に遡ることを意味するものでない。現代美術の中に、新しい表現や視点が含まれているが、芸術家たちは、自分自身の眼で事象を見、自分たちの文化や伝統に根ざして彼らの生活体験を表現しているのである。彼らの作品は、政治的独立のたたかいや、社会的正義や自由の実現のための戦いなどを反映しており、それらは、彼らの伝統や生活状況から切り離すことの出来ないものである。

竹中教授は、「真のキリスト教美術は、芸術家のおかれている特定状況における信仰の告白である」(二十八頁)といっている。本書に掲載されている作品をみると、その告白に触れるおもいがするし、巻末の作家の略歴を読むと、彼らが経験した生活状況についての理解を深めることが出来る。

本書にはオーストラリアやニュージーランドを含む、アジア・太平洋地域の一八カ

国から一二〇点の作品が収録されている。その中、五十八の作品は美しい原色で印刷されており、本書の価値を高めている。白黒の写真の印刷もきわめて鮮明である。わたしは、彫刻の作品にとくに深い印象を覚えた。

これらの作品は、わたしたちに新しい宗教的な視野と理解を与え、わたしたちの眼を通して福音に触れる機会を与えている。さらに、いままで知らなかったこれらの芸術作品を眺めることによって、美についてのわたしの理解を深めることが出来た。

この本を評価するためには、まずこの本を見る必要がある。こうした価値ある、そして美しい書物をまとめられた竹中教授の努力に敬意を表すると共に、出版の労をとられた教文館と、アジアキリスト教協議会に感謝の意をあらわしたいと思う。

(B・D・タッカー：大学文学部教授)

* *

(一〇五頁より)

研究者の論文をみると、何か潑刺としたものを感じる。同志社ハリス理科学学校の廃校

(明治三〇年)以来、半世紀以上の長い空白時代を終って復活した新生工学部の喜びとその溢れるばかりの若いエネルギーが生み出したものが「同志社工学会報」と言うことができれば。一巻二号は同志社ハリス理科学学校開校六〇周年を記念して、ハリス氏記念号として特集されている。その中には理科学学校の大先輩である加藤与五郎先生の「ハリス理科学学校の思い出」と題する、誠に貴重な論文が掲載されている。心ある人の御一読をお薦めする。同志社ハリス理科学学校は、ひろくわが国の自然科学の研究、教育の歴史を語るとき不問に付すことのできないものであるが、残念なことに、これまでこれに関する調査研究は皆無に近いのが実情である。いささか場違いの感はあるが今後の調査研究を期待しておきたい。できれば将来、これに関する調査論文が掲載されるよう期待したいと思う。

「理工学研究報告」は、前述のように今日多くの問題を抱えていることも事実であるが、いま一度創刊当時の心意気を思い返して、ますますよい論文が出るよう努力すべきであろう。

(大学工学部教授・末光力作)